京都〈ゆうゆうの里〉入居者インタビュー

絵を書くために、旅に出る！
～私たち夫婦の生きがい～

加藤　彰一様（80歳）・美津子様（79歳）

今回は、京都ゆうゆうの里が開設された当初から入居されている、加藤様ご夫妻にお話しを伺いました。

絵になる眺望に惚れこみ決意

「私たち夫婦は名古屋出身。子供もいないし、早くから入居を考え、名古屋から近い浜松に申込をしていました。偶々、京都に新しく施設が出来ると聞いて見に行ったんですよ。その時に見た風景が未だに脳裏に焼き付いて離れません。部屋の窓から正面に生駒山が見えて、四季の移り変わりを楽しめる。宇治の自然に恵まれた眺望は、そのまま絵になるロケーション。好きな絵を描くのに絶好のスポットだと思い、この里に住むことを決めたんですよ。」と、当時を思い出しながら懐かしそうに話されます。

「絵を描き始めたのは、小学生の頃。担任の先生が有名な画家だった影響です。当時はパステル画でしたが、大人になってから油絵も習ってましたね。入居して、偶然画家を目指していた方と知り合いになり、その方に勧められて水彩画を始め、描いた絵を批評してもらうようになりました。その内にそれじゃ、ふたりでサークルを立ち上げよう！（笑）と、盛り上がってね。里のサークル第一号【絵画サークル】が発足したわけです。」と、ご主人。一方の奥様にもお話しを伺いました。

奥様が描かれた水彩画

一人より二人の方が楽しい

「私は絵じゃなくて、手編みの指導員をしていたの。二人で良く旅行に出かけるけど、主人はいつもスケッチ旅行を楽しんでいる。絵を描かない私はひとりでブラブラ。それで、ある時思いついたのよ。私も一緒に絵を描けば、もっと旅行を楽しめるんじゃないかなって。それで描き始めたの。夫婦で同じ趣味を持つことは、素敵なことよね。共通の話題があってとても楽しい。体調が悪くても、ひとりでも描けることがお互いの励みになってます。いい絵を描きたいから旅に出る。旅行は二人の記念日にかこつけて出かけてるの。5月は主人の誕生日、10月は私の誕生日。年末は新しい年を迎えるためのリフレッシュ記念日というようにね。旅先からお互いに宛てて絵手紙を送って、お互いの成長を楽しんでいます。」

旅先からお互いに宛てて
書いた絵手紙

周囲のエールが励み・個展に挑戦

「70歳の記念に何をしようかなと考えていた時、入居者や友人に勧められて、生涯学習センターで個展を開くことになったんです。その後も宇治市民絵画展に、毎年新しく描いた絵を出しています。廻りの人から今年も楽しみにしているよと云われたり、職員や昔から知っている入居者からのエールが励みになっているんです。目標があるから、絵を描き続けられる。スケッチブックは年1冊二人で2冊のペースで描き、もう15年も続けているんですよ。これからも元気な限り、続けていきたいですね。」と。

お二人は同じ目標を持ち、共に寄り添って、お互いを認め合っておられる様子が伺えます。いつまでも、仲良く趣味を満喫していただきたいと願っております。